海の使者

泉鏡花

上

何心なく、背戸の小橋を、向こうの蘆へ渡りかけて、思わず足を留めた。

不図、鳥の鳴音がする。……いかにも優しい、しおらしい声で、きりきり、きりりりり。

その声が、直ぐ耳近に聞こえたが、つい目前の樹の枝や、茄子畑の垣根にした藤豆の葉蔭ではなく、歩行く足許の低い処。

其処で、立ち佇って、ちょっと気を注けたが、もう留んで寂りする。――秋の彼岸過ぎ三時下りの、西

日が薄曇(うすぐも)った時であった。この秋の空ながら、まだ降りそうではない。桜山(さくらやま)の背後(うしろ)に、薄黒い雲は流れたが、玄武寺(げんむじ)の峰(みね)は浅葱色(あさぎいろ)に晴れ渡って、石を伐(き)り出した岩の膚(はだ)が、中空(なかぞら)に蒼白(あおじろ)く、底に光を帯(お)びて、月を宿(やど)していそうに見えた。

その麓(ふもと)まで見通しの、小橋(こばし)の彼方(かなた)は、一面の蘆で、出揃(でそろ)って早(は)や乱れかかった穂が、霧のように群立(むらだ)って、藁屋(わらや)を包み森を蔽(おお)うて、何物にも目を遮(さえぎ)らせず、山々の茅薄(かやすすき)と一連(ひとつら)に靡(なび)いて、風はないが、さやさやと何処(どこ)かで秋の暮を囁(ささや)き合う。

その蘆の根を、折れた葉が網に組み合せた、裏づた

いの畦路へ入ろうと思って、やがて踏み出す、とまたきりりりりと鳴いた。

「なんだろう」

虫ではない、確かに鳥らしく聞こえるが、やっぱり下の方で、どうやら橋杭にでもいるらしかった。

「千鳥かしらん」

いや、磯でもなし、岩はなし、それの留まりそうな澪標もない。あったにしても、こう人近く、羽を驚かさぬ理由はない。

汀の蘆に潜むか、と透かしながら、今度は心してもう一歩。続いて、がたがたと些と荒く出ると、拍子に

掛かって、きりきりきり、きりりりり、と鳴き頻（しき）る。

熟（じっ）と聞きながら、うかうかと早（は）や渡り果てた。

橋は、丸木を削（けず）って、三、四本並べたものにすぎぬ。合せ目も中透（なかす）いて、板も朽ちたり、人通りにはほろほろと崩（くず）れて落ちる。形（かたち）ばかりの竹を縄搦（なわから）げにした欄干（てすり）もついた、それも膝（ひざ）までは高くないのが、往（ゆ）き還（かえ）り何時（いつ）もぐらぐらと動く。橋杭（はしぐい）ももう痩（や）せて――潮入（しおい）りの小川の、なだらかにのんびりと薄墨色（うすずみいろ）して、瀬は愚か、流れるほどは揺れもしないのに、水に映る影は弱って、倒（さかさま）に宿る蘆（あし）の葉とともに蹌踉（よろよろ）する。

が、いかに朽ちたればといって、立樹（たちき）の洞（ほら）でないも

のを、橋杭に鳥は棲(す)むまい。馬の尾に巣くう鼠(ねずみ)はありと聞けど。

「どうも橋らしい」

もう一度、試みに踏み直して、橋の袂(たもと)へ乗り返すと、跫音(あしおと)とともに、忽(たちま)ち鳴き出す。

（きりきりきり、きりりりり……）

あまり爪尖(つまさき)に響いたので、はっと思って浮足で飛び退(すさ)った。その時は、雛(ひな)の鶯(うぐいす)を蹂(ふ)み躙(にじ)ったようにも思った、傷々(いたいた)しいばかり可憐(かれん)な声かな。

確かに今乗った下らしいから、また葉を分けて……ちょうど二、三日前、激しく雨水の落とした後(あと)の、汀(みぎわ)

が崩（くず）れて、草の根のまだ白い泥土（どろつち）の欠目（かけめ）から、楔（くさび）の弛（ゆる）んだ、洪水（でみず）の引いた天井裏見るような、横木（よこぎ）と橋板（はしいた）との暗い中を見たが何（なに）もおらぬ。……顔を倒にして、捻（ね）じ向いて覗（のぞ）いたが、ト真赤な蟹（かに）が、ざわざわと動いたばかり。やどかりはうようよ数珠形（じゅずなり）に、其処（そこ）ら暗い処（ところ）に蠢（うごめ）いたが、声のありそうなものは形もなかった。

手を払って、

「ははあ、岡沙魚（おかはぜ）が鳴くんだ」

と独りで笑った。

中

　虎沙魚（とらはぜ）、衣沙魚（ころもはぜ）、ダボ沙魚（はぜ）も名にあるが、岡沙魚と言うのがあろうか、あっても鳴くかどうか、覚束（おぼつか）ない。けれどもその時、ただ何（なん）となくそう思った。

　久しい後（あと）で、その頃薬研堀（やげんぼり）にいた友だちと二人で、木場（きば）から八幡様（はちまんさま）へ詣（まい）って、汐入町（しおいりちょう）を土手（どて）へ出て、永代（えいたい）へ引っ返したことがある。それも秋で、土手を通ったのは黄昏時（たそがれどき）、果てしのない一面の蘆原（あしはら）は、ただ見る水のない雲で、対方（むこう）は雲のない海である。路（みち）には処々（ところどころ）、葉の落ちた雑樹（ぞうき）が、乏（とぼ）しい粗朶（そだ）のごとく疎（まばら）に散（ち）らかって見えた。

「こういう時（とき）、こんな処（ところ）へは岡沙魚（おかはぜ）というのが出て遊ぶ」

と渠（かれ）は言った。

「岡沙魚ってなんだろう」と私（わたし）が聞いた。

「陸（おか）に棲（す）む沙魚なんです。蘆（あし）の根から這（は）い上がって、其処（そこ）らへ樹上（きのぼ）りをする……性（しょう）が魚（うお）だからね、あまり高くは不可（いけ）ません。猫柳（ねこやなぎ）の枝なぞに、ちょんと留（と）まって澄（す）ましている。人の跫音（あしおと）がするとね、ひっそりと、飛んで隠（かく）れるんです……この土手の名物だよ。……劫（こう）の経た奴（やつ）は鳴くとさ」

「なんだか化（ば）けそうだね」

「いずれ怪性（けしょう）のものです。ちょいと気味の悪いものだよ」

で、なんとなく、お伽話（とぎばなし）を聞くようで、黄昏（たそがれ）のものの気勢（けはい）が胸に染（し）みた。――なるほど、そんなものも居（い）そうに思って、ほぼその色も、黒の処へ黄味（きみ）がかって、ヒヤリとしたものらしく考えた。

後（あと）で拵（こしら）え言（ごと）、と分かったが、何故（なぜ）か、ありそうにも思われる。

それが鳴く……と独りで可笑（おか）しい。

もう、一度、今度は両手に両側の蘆を取って、ぶら下るようにして、橋の片端を拍子（ひょうし）に掛けて、トンと遣（や）

る、キイと鳴る、トントン、きりりと鳴く。

（きりりりり、
きり、から、きい、から、
きりりりり、きいから、きいから、）

紅(くれない)の綱で曳(ひ)く、玉(たま)の轆轤(ろくろ)が、黄金(こがね)の井の底に響く音。

「ああ、橋板(はしいた)が、きしむんだ。削(けず)ったら、名器の琴になろうもしれぬ」

そこで、欄干(らんかん)を掻(か)い擦(さす)った、この楽器に別れて、散策(さんさく)の畦(あぜ)を行(ゆ)く。

と蘆の中に池……というが、やがて十坪(とつぼ)ばかりの

窪地（くぼち）がある。汐（しお）が上げて来た時ばかり、水を湛えて、真水には干（ひ）て了（しま）う。池の周囲（まわり）はおどろおどろと蘆の葉が大童（おおわらわ）で、真中所（まんなかどころ）、河童（かっぱ）の皿にぴちゃぴちゃと水を溜（た）めて、其処を、干潟（ひがた）に取り残された小魚（こうお）の泳ぐのが不断（ふだん）であるから、村の小児（こども）が袖（そで）を結（ゆ）って水悪戯（みずいたずら）に掻（か）き廻（まわ）す。……やどかりも、うようよいる。が、真夏などは暫時（しばらく）の汐の絶間（たえま）にも乾き果てる、壁のように固（かた）まり着いて、稲妻（いなずま）の亀裂（ひび）が入（はい）る。さっと一汐（ひとしお）、田越川（たごえがわ）へ上げて来ると、じゅうと水が染みて、その破（や）れ目（め）にぶつぶつ泡立（あわだ）って、やがて、満々と水を湛える。

汐（しお）が入（はい）ると、さて、さすがに濡（ぬ）れずには越せないか

ら、此処にも一つ、——以前の橋とは間十間とは隔たらぬに、また橋を渡してある。これはまた、纔かに板を持って来て、投げたにすぎぬ。池のつづまる、この板を置いた切れ口は、ものの五歩はない。水は川から灌いで、橋を抜ける、と土手形の畦に沿って、蘆の根へ染み込むように、何処となく隠れて、田の畦へと落ちて行く。

今、汐時で、薄く一面に水がかかっていた。が、水よりは蘆の葉の影が濃かった。

今日は、無意味では此処が渡れぬ、後の橋が鳴ったから。待て、これは唄おうもしれない。

と踏み掛けて、二足ばかり、板の半ばで、立ち停ったが、何にも聞こえぬ。固より聞こうとしたほどでもなしに、何となく夕暮の静かな水の音が身に染みる。岩端や、ここにも一人、と、納涼台に掛けたように、其処に居て、さして来る汐を視めて少時経った。

下

水の面とすれすれに、むらむらと動くものあり。何か影のように浮いて行く。……はじめは蘆の葉に縋った蟹が映って、流るる水に漾うのであろう、と見たが、

あらず、然（さ）も心あるもののごとく、橋に沿うて行（ゆ）きつ戻りつする。さしたての潮（しお）が澄んでいるから差（さ）し覗（のぞ）くとよく分かった——幼児（おさなご）の拳（こぶし）ほどで、ふわふわと泡（あわ）を束（つか）ねた形。取り留めのなさは、ちぎれ雲が大空（おおぞら）から影を落としたか、と視められ、ぬぺりとして、ふうわり軽い。全体が薄樺（うすかば）で、黄色い斑（ぶち）がむらむらして、流れのままに出たり、消えたり、結んだり、解けたり、どんよりと濁肉（にごりじし）の、半ば、水なりに透き通るのは、是（これ）なん、別のものではない、虎斑（とらまだら）の海月（くらげ）である。

生（しょう）ある一物（いちもつ）、不思議はないが、いや、快く戯（たわむ）れる。自在に動く。……が、底ともなく、中（なか）ほどともなく、

上面（うわつら）ともなく、一条（ひとすじ）、流れの薄衣（うすぎぬ）を被（かつ）いで、ふらふら、ふらふら、……斜（はす）に伸びて流るるかと思えば、むっくり真直に頭（ず）を立てる、と見ると横になって、すいと通る。

時に、他（ほか）に浮んだものはなんにもない。

この池を独り占（じ）め、得意の体（てい）で、目も耳もない所為（せい）か、熟（じっ）と視める人の顔の映った上を、ふい、と勝手に泳いで通る、通る、と引き返してまた横切る。

それがまた思うばかりではなかった。実際、其処に踞（しゃが）んだ、胸の幅（はば）、唯（ただ）、一尺ばかりの間（あいだ）を、故（わざ）とらしく泳ぎ廻（まわ）って、これ見よがしの、ぬっぺらぼう！

憎い気がする。

と膝を割って衝と手を突ッ込む、と水がさらさらと腕に搦んで、一来法師、さしつらりで、ついと退いた、影も溜らず。腕を伸ばしても届かぬ向こうで、くるりと廻る風して、澄ましてまた泳ぐ。

「此奴」

と思わず呟いて苦笑した。

「待てよ」

獲物を、と立って橋の詰へ寄って行く、とふわふわと着いて来て、板と蘆の根の行き逢った隅へ、足近く、ついと来たが、蟹の穴か、蘆の根か、ぶくぶく白泡が

立ったのを、ひょい、と気なしに被（かぶ）ったらしい。

ふッ、と言いそうなその容体（ようだい）。泡を払うがごとく、むくりと浮いて出た。

その内（うち）、一本根（ひともと）から断（き）って、逆手（さかて）に取ったが、くなくなした奴（やつ）、胴中（どうなか）を巻いて水分かれをさして遣（や）れ。で、密（そっ）と離れた処（ところ）から突ッ込んで、横寄せに、そろりと寄せて、這奴（しゃつ）が夢中で泳ぐ処を、すいと掻（か）きあげると、つるりと懸かった。

蓴菜（じゅんさい）が搦（から）んだようにみえたが、上へ引く雫（しずく）とともに、つるつると辷（すべ）って、もう何（なん）にもなかった。

「鮹（たこ）の燐火（ひとだま）、退散（たいさん）だ」

それみろ、と何か早や、勝ち誇った気構えして、蘆の穂を頬摺りに、と弓杖をついた処は可かったが、同時に目の着く潮のさし口。

川から、さらさらと押して来る、蘆の根の、約二間ばかりの切れ目の真中。橋と正面に向き合う処に、くるくると渦を巻いて、坊主め、色も濃く赫と赤らんで見えるまで、躍り上がる勢いで、むくむく浮き上がった。

ああ、人間に恐れをなして、其処から、川筋を乗って海へ落ち行くよ、と思う、と違う。

しばらく同じ処に影を練って、浮いつ沈みつしてい

たが、やがて、すいすい、横泳ぎで、しかし用心深そうな態度で、蘆の根づたいに大廻りに、ひらひらと引き返す。

穂は白く、葉の中に暗くなって、黄昏の色は、うらがれかかった草の葉末に敷き詰めた。

海月に黒い影が添って、水を捌く輪が大きくなる。

そして動くに連れて、潮はしだいに増すようである。水の面が、水の面が、脈を打って、ずんずん拡がる。嵩増す潮は、さし口を挟んで、川べりの蘆の根を揺すぶる、……ゆらゆら揺すぶる。一揺り揺れて、ざわざわと動くごとに、池は底から浮き上がるものに見えて、

しだいに水は増して来た。映《うつ》る影は人も橋も深く沈んだ。早《は》や、これでは、玄武寺《げんむじ》を倒《さかさ》に投げうっても、峰《みね》は水底《みなそこ》に支《つか》えまい。

　蘆のまわりに、円《まろ》く拡がり、大洋《わたつみ》の潮《うしお》を取って、穂先に滝津瀬《たきつせ》、水筋《みすじ》の高くなり行《ゆ》く川面《かわづら》から灌《そそ》ぎ込《こ》むのが、一揉《ひとも》み揉んで、どうと落ちる……一方口《いっぽうぐち》［＃「一方口《いっぽうぐち》」は底本では「方口《いっぽうぐち》」］のはけ路《みち》なれば、橋の下は颯々《さっさっ》と瀬になって、畦《あぜ》に突き当たって渦《うず》を巻くと、其処《そこ》の蘆は、裏を乱《みだ》して、ぐるぐると舞うに連れて、穂綿が、はらはらと薄暮《うすくれ》あいを蒼《あお》く飛んだ。

　（さっ、さっ、さっ、

しゅっ、しゅっ、しゅっ、
エイさ、エイさ！）

と矢声（やごえ）を懸けて、潮（しお）を射て駈（か）けるがごとく、水の声が聞きなさるる。と見ると、竜宮の松火（たいまつ）を灯（とも）したように、彼の身体（からだ）がどんよりと光を放った。

白い炎が、影もなく橋にぴたりと寄せた時、水が穂に被（かぶ）るばかりに見えた。

ぴたぴたと板が鳴って、足がぐらぐらとしたので私（わたし）は飛び退（の）いた。土に下りると、はや其処に水があった。

橋がだぶりと動いた、と思うと、海月は、むくむく

と泳ぎ上がった。水はしだいに溢(あふ)れて、光物(ひかりもの)は衝々(つつ)と尾を曳(ひ)く。

この動物は、風の腥(なまぐさ)い夜(よ)に、空(そら)を飛んで人を襲うと聞いた……暴風雨(あらし)の沖には、海坊主(うみぼうず)にも化(ば)けるであろう。

逢魔(おうま)ケ時を、慌(あわただ)しく引き返して、旧(もと)来た橋へ乗る、と、

（きりりりり）

と鳴った。この橋はやや高いから、船に乗った心地(ここち)して、まず意(こころ)を安んじたが、振り返ると、もうこれも袂(たもと)まで潮(しお)が来て、海月はひたひたと詰め寄せた。が、

さすがに、ぶくぶくと其処で留った、そして、泡が呼吸(いき)をするような仇光(あだびかり)で、

（さっさっさっ。

しゅっしゅっ、

さっ、さっ！）

と曳々声(えいえいごえ)で、水を押し上げようと努力(つとむ)る気勢(けはい)。玄武寺(げんむじ)の頂なる砥(と)のごとき巌(いわお)の面(おも)へ、月影が颯(さっ)とさした。——

底本：「高野聖」集英社文庫、集英社
1992（平成4）年12月20日第1刷発行
1993（平成5）年6月5日第2刷発行
初出：「文章世界」
1909（明治42）年7月
※修正箇所は「鏡花全集　巻十二」（岩波書店、1942）を参照しました。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2008年12月5日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。